

# 日本分析化学会第61年会

## 1 はじめに

日本分析化学会第61年会は、2012年9月19日から21日までの3日間、金沢大学角間キャンパスにて開催された。金沢での開催は34年ぶりである。緑豊かなキャンパス周辺には、時折狸や狐、そして熊までもが出没する里山が広がる。山間部とはいえ直前まで残暑が厳しく心配したが、会期中はにわか雨には見舞われたもののおおむね秋らしい天候に恵まれ、比較的過ごしやすかったことは幸いであった。今回は自然科学本館内に受付、一般講演会場、ポスター・展示会会場、学会賞等授賞式・受賞講演会場を設け、建物外に出ることなく会場間を移動できるようにした。総講演数は774件（研究懇談会講演、受賞講演、シンポジウム講演を含む）、参加登録者数は1,321名であり、例年どおりの盛会であった。本年会の開催には財金沢コンベンションビューローに協賛いただき、観光パンフレットを提供いただいた。また、アサヒグループホールディングス(株)、サントリービジネスエキスパート(株)、ハウス食品(株)（以上50音順）より各種清涼飲料を提供いただいた。紙面を借りて御礼申し上げる次第である。これらは受付の際に先着順で900名程度の参加者に配布された。なお、報道関係者への広報として、会期前日の9月18日(火)に石川県庁にて記者会見を行った。

## 2 講演

〔プログラム責任者：井村久則（金沢大理工研究域）、会場責任者：小谷 明（金沢大医薬保健研究域）、一ノ木 進（北陸大教育能力開発セ）、若手ポスター責任者：牧 輝弥（金沢大理工研究域）〕

一般講演358件が10講義室にて行われた。各講義室は適度な広さでプレゼンテーション環境も充実しており、講演会場として快適であった。八つの会場を1階に横並びに配置し、残りの会場も2階の階段横に配置して、会場間を移動しやすいようにした。これができたのも角間キャンパスが立地する雪深い山間部を意識した設計のおかげである。会場間を行き来する参加者が例年になく多く、各会場では活発な討論がかわされていたように感じた。廊下の随所に配置された各会場の案内板、会場配置図などは、よりスムーズな参加者の移動を促すよう工夫した。

講演には、従来どおり講演者のPCを持ち込む方法を採用した。数講演ごとに15分間のPC接続時間を設け、PC切替機

に複数のPCを接続して行う方法に講演者、会場係も慣れてきたためか、プログラムの進行には特に大きなトラブルはなかったが、それでも一部の会場で、講演を待つ間にPCがフリーズし再起動を余儀なくされた事例や、PC接続時間に間に合わず

表1 第61年会分類別講演申込および聴講者一覧表

分類	一般講演者数	テクノレビュー	最大聴講者数	一般ポスター	若手ポスター
01: 原子スペクトル分析	14		75	15	5
02: 分子スペクトル分析	14		32	6	6
03: レーザー分光分析	11		42	2	2
04: X線分析・電子分光	8		50	5	6
05: 放射化学分析	2		27		1
06: NMR, ESR, 磁気	3		15		
07: 電気化学分析	25		52	5	7
08: センサー	21		46	3	23
09: 熱分析					
10: 有機微量分析		1	45	1	2
11: 質量分析	4		22	4	4
12: マイクロ分析系	10		32		3
13: FIA	9		41		5
14: LC	21	1	64	19	11
15: GC	7	2	44	5	3
16: 電気泳動分析	18		42	2	5
17: 溶媒・固相抽出法	17		51	8	13
18: 分離・分析試薬	15		43	3	11
19: 分析化学反応基礎論	2		18	4	4
20: データ処理	3		19	3	
21: 標準試料	4		45	3	
22: サンプリング, 前処理	3		34	4	5
23: 界面・微粒子分析	34		44	3	16
24: 宇宙・地球	15		41	3	2
25: 地球環境関連分析	30		54	19	16
26: 無機・金属材料分析	2		31	5	
27: 有機・高分子材料	4	1	52	2	
28: 生体・医薬・臨床	14		59	19	13
29: バイオ分析	39		63	8	19
30: その他	9		27	4	2
合計	358	5		155	184



第61年会会場入口



講演会場



ポスター会場と付設展示会

講演直前に PC を接続した事例などがあつたようである。会場の中央スクリーンの横に長机を設置し、そこに PC を並べて接続してもらい、必要に応じて PC をスクリーンに近い側に、あるいは演台に移動して講演していただいた。多少ケーブルの取り回しに苦労する場面も見受けられたが、おおむねスムーズな進行ができていた。

研究懇談会講演は、1 日目午前中に 8 件、午後 8 件、2 日目午前中に 5 件の合計 21 件が行われた。これらの講演は関連セッションの最後に配置し、一般講演時間と極力重複しないようにした。

ポスター発表では、付設展示を同一会場とする方針から、いくつかの口頭発表会場前に広がるアカデミックプロムナードで実施した。3 階（地下 2 階の受付から見ると 5 階に相当）まで吹き抜けとなっているためスペース以上に開放感があり、また所々にソファなど休憩スペースも確保されていたため、参加者には好評であった。1 日目には、若手企画として若手ポスター発表 184 件が行われた。このうち 18 件が厳正な審査の結果ポスター賞に選出され、ミキサーにて表彰した。2 日目および 3 日目の午前には一般ポスター発表 155 件が行われた。今回は会場が広く、かなりのポスター枚数を同時に掲示可能であったことから、掲示時間を 180 分間（初日午前は 195 分間）、発表時間を 90 分間（奇数・偶数番号それぞれ 45 分間）と例年より長めに設定した。その甲斐あつてか、随所で活発な討論が展開されたようである。ただし、予想以上の盛況ぶりで、会場の冷房能力が追いつかなかつた点はお詫び申し上げたい。また、口頭発表会場と隣接していたため、口頭発表会場でのドア開閉の際にポスター会場の熱気が一部漏れ伝わり、それが気になった参加者もいたかもしれない。

### 3 特別シンポジウム

今回の年会では公開シンポジウムを含め、五つの特別シンポジウムが開催された。

#### (1) 「バイオセンシングの最先端」(9 月 19 日午後)

[オーガナイザー：遠田浩司（富山大院理工）、共催：化学センサー研究懇談会、最大聴講者数 200 名]

分子プローブやナノデバイス、ナノセンサーの著しい発展により、細胞中の情報伝達機構の可視化や DNA1 分子解析などが可能となりつつある今日、第一線で活躍されているバイオセンシングの研究者より 9 件の最先端研究を紹介していただいた。

#### (2) 「1 分子解析技術開発の最前線と次世代医療への展開」(9 月 20 日午前)

[オーガナイザー：馬場嘉信（名大院工）、最大聴講者数 200 名]

内閣府・最先端研究開発支援プログラム・川合プロジェクトで活躍されている研究者より、1 分子解析技術の基礎研究から医療応用にいたる最先端研究の成果と新技術の標準化・薬事承認に向けたシステム改革を紹介していただいた。



ミキサー：若手ポスター賞受賞者

#### (3) 「アジアの環境汚染を測る—分析化学が果たすべき役割は—」(9 月 20 日午前)

[オーガナイザー：亀田貴之（金沢大医薬保健研究域）、最大聴講者数 37 名]

アジア地域における海洋汚染、大気汚染の現状把握と汚染機構の解明のために、最先端の分析技術を駆使して取り組む研究者より、広域汚染の観測と汚染動態解析、越境汚染・輸送の解明に関する最近の研究成果を紹介していただいた。

#### (4) 「宝石サンゴを解明する分析化学」(9 月 21 日午前)

[オーガナイザー：長谷川 浩（金沢大理工研究域）、最大聴講者数 41 名]

宝石サンゴの生態、生物量、成長速度、炭酸塩形成メカニズム、成熟時期などの研究を通して、様々な分析化学的手法によって現在明らかにされつつある「宝石サンゴの科学」について詳しく解説していただいた。

#### (5) 公開特別シンポジウム「福島原発から考える元素動態」

(9 月 21 日午後)

[オーガナイザー：小谷 明（金沢大医薬保健研究域）、最大聴講者数 150 名]

東日本大震災から 1 年半が過ぎた今なお放射能・放射線の話題がつきることがない現状に鑑み、放射能・放射線の基礎から、放射性元素の動態、除染技術、そして計測結果に至るまで、研究者自身のこれまでの取り組みを交えて詳しく紹介していただくとともに、リスクコミュニケーションの重要性を改めて説いていただいた。

### 4 付設展示会、ランチョンセミナー、テクノレビュー

[責任者：長谷川 浩（金沢大理工研究域）]

ポスター会場に併設する形で付設展示会が開催された。今回は、機器展示に 24 社（26 ブース）、書籍販売に 1 社、カタログ展示に 3 社（4 件）のご協力をいただいた。例年どおり、ポスター会場内で展示会を開催したため、多くの来場者があり、展示各社にはおおむね好評であった。各ブースでは、パネル展示およびカタログ配布を中心として新製品などの紹介や出版物の公開が行われたが、中には分析機器などを展示し、注目を集めているところもあった。

1 日目および 2 日目の昼休みに 7 社によるランチョンセミナーが開催された。地元の食材（「じわもん」と呼ぶらしい）を使った弁当を食べながら企業の宣伝を兼ねたセミナーを聞くことができるとあって、すべてのチケットが早々になくなり、総参加者は 565 名にも及んだ。これは、角間キャンパスの立地により大学食堂以外で昼食をとるのが困難だったことも一因かもしれないが、近年継続的に開催されているこの催しが、参加者に定着してきたことが大きいと考える。また、今回の年会では 5 件のテクノレビュー講演が行われた。有機微量分析、LC、GC、有機・高分子材料分析などに関連した新製品、新技術の紹介がなされ、いずれも興味深い内容であった。ランチョ



学会賞等授賞式

ンセミナー、テクノレビュー講演は企業中心に行われるものであるが、規模、講演時間などの違いにより、現在のところ住み分けができてきているようである。開催各社、参加者ともにメリットのあるこれらの催しは、今後も継続的に実施されるべきであろう。

## 5 学会賞等授賞式、学会賞講演など

〔責任者：国本浩喜（金沢大理工研究域）〕

学会賞等授賞式および学会賞受賞講演は、2日目の13時30分より大講義棟大講義室にて行われた。授賞式では、中村 洋会長の挨拶の後、学会賞、奨励賞、学会功労賞、技術功績賞、先端分析技術賞（JAIMA 機器開発賞、CERI 評価技術賞）および有功賞の審査結果が各審査委員長から報告され、受賞者に賞状と副賞が授与された。授賞式の後、恒例の有功賞受賞者の記念撮影が自然科学棟本館玄関前にて行われた。その後、14時50分より、菅原正雄氏、中井 泉氏、中澤裕之氏による学会賞受賞講演が行われた。技術功績賞の中野信夫氏、山田 隆氏、吉川裕泰氏、奨励賞の岡本行広氏、北村裕介氏、児玉谷仁氏、佐藤しのぶ氏、山本茂樹氏の受賞講演は関連する一般講演会場で行われた。

## 6 ミキサーおよび懇親会

ミキサー〔責任者：牧 輝弥（金沢大理工研究域）〕は、1日目の18時より138名（一般76名、学生62名）の参加者を得て、角間キャンパス中地区中福利生協食堂にて行われた。自然科学棟本館からミキサー会場までの移動には中連絡橋を利用されたと思うが、橋の上から単一キャンパスとしては全国でも有数の広さを誇る角間キャンパスの大きさを感じていただけたのではないだろうか。年会実行委員長（早川和一）による開会の挨拶の後、副委員長（井村久則）の乾杯の発声でミキサーが始まった。しばらくの歓談の後、若手ポスター賞の表彰式が行われ、賞状と副賞が贈呈され、受賞者を代表し2名の学生から受賞の喜びが述べられた。学生の参加数も若干増え、料理を囲みながらの交流も盛り上がった。今後さらに学生数が増加することを期待したい。

懇親会〔責任者：亀田貴之（金沢大医薬保健研究域）〕は、2日目の18時30分から、金沢市香林坊に位置する金沢エクセルホテル東急にて行われた。350名の参加のもと、年会実行委員長と中村 洋会長の挨拶、櫻井 勝金沢大学理事・副学長の来賓挨拶に続き、寺田喜久雄金沢大学名誉教授の乾杯のご発声で懇親会が開始した。北陸らしい食と、地元に住むものでも入手が難しい地酒に舌鼓を打ちながらしばし歓談した後、伝統芸能である素囃子がお披露目されると、盛り上がりは最高潮に達した。その後、会場内では芸子さんたちと交流する機会も設けられた。その美しさに酔いを忘れ、いつもより飲み過ぎてしまった参加者もいたのでは…。会の終盤では、次年度開催される討論会の板橋 豊（北大院水産）実行委員長、年会の掛樋一晃（近畿大薬）実行委員長、ASIANALYSIS XIIの今坂藤太



懇親会：寺田先生による乾杯のご発声

郎（九大院工）委員長から挨拶をいただいた。20時30分をもって樋上照男中部支部長が中締め挨拶をしてお開きとなったが、21時近くまでなごりを惜しむように懇談が続いた。

## 7 その他

今回の年会では、角間キャンパス内に常設の託児所がないことから、街中の託児所を利用した。利用件数は1件（児童2名、2日間）であった。

休憩室は口頭発表会場に近接した2室を設置したが、そのうち1室は会場の最も奥まったところに設置されていたためわかりにくかったかもしれない。ポスター会場の奥になお続くゆとりある吹き抜けのアカデミックプロムナードにもソファ、椅子・テーブルなどが豊富に配置されており、休憩、議論、懇談に便利に利用されていた。また、金沢大学総合メディア基盤センターの協力により、無線LANを利用したインターネット接続も提供し活用された。

クロックは、建物の設計上の理由により、受付から階段を上ったフロアにやむなく設置したが、本来であれば受付と同じフロアに設置したほうがよいであろう。また、2日目午後クロックが利用できなかった点についても、この場を借りてお詫び申し上げたい。

## 8 おわりに

年会に参加された会員、展示に出展された企業、その他第61年会に参画していただいたすべての方々に、まずはこの場を借りて御礼申し上げたい。34年ぶりということに不安もあったが、大きなトラブルなしに年会を閉会できたことに安堵しているところである。中部支部の大学関係者、公的機関、企業などの会員により構成された実行委員が総出で運営してくれたおかげである。各位に深く感謝したい。

今回の年会では、従来どおり分厚い要旨集を配布したが、金沢市の中心地から決して近くない会場までの移動の際、その重さをこれまで以上に感じた参加者も少なくなかったのではないだろうか。懇親会での中村 洋会長の挨拶では、今回が冊子体の講演要旨集を配布する最後の会になるであろうとのこと。電子媒体による講演要旨の配布は昨年のICAS2011で行われている。討論会、年会においてはPCを持参する参加者が増加していることを考えると、講演要旨の電子データ化は自然な成り行きかもしれない。その場合、講演会場でも要旨をweb上で閲覧できるようにするための無線LAN環境が会場に整っていると便利であろう。また、PCをバッテリー駆動する機会が増えれば予想されることから、会場内にPCを充電できる場所があれば安心である。これらの点については、ぜひ検討をお願いしたい。

最後に、本年会の会期中、熊に遭遇する参加者がいなかったことに、実行委員一同、胸を撫で下ろしている。

〔金沢大学医薬保健研究域（薬学系） 早川和一〕  
〔富山大学大学院理工学研究部（工学） 加賀谷重浩〕